



TITLE:

先づ天を知れ

AUTHOR(S):

賀川, 豊彦

---

CITATION:

賀川, 豊彦. 先づ天を知れ. 天界 1940, 20(226): 110-110

ISSUE DATE:

1940-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167938>

RIGHT:

西尾、田村、竹内、寺澤、中窪、山形、枝川諸氏は、上記大口氏の15糎を使用された。

堀田氏——11糎反射で素晴らしいスケッチだが、1枚では惜しい。次回の御奮起を希ふ。

三宅氏——最小口径で、事實上、火星は餘りにも無理だつた事と思ふ。

以上の如くで、今回は、花山のクツクが活用されなかつた代りに、倉敷のカルプ1が有効に使用され、又前2回に比較して15糎級が目立つて多く活用されたのは喜ばしい現象である。

一つ注意すべきは、各人の網膜の感受性によつて、非常な高倍率と、標準以下の低い倍率を好む方の2つがあるが、餘り無謀でない限り、適當な高倍率は細かいディテール(例へば、極冠の形狀、“海”の周邊等)を見るに適し、反射鏡に中倍率を使用すれば色彩の検出に優れ、事實今回の色彩スケッチは全て、反射望遠鏡の使用者にのみ得られてゐる。

結果として、今回の大接近の火星の高度と、シーイングに對しては、20糎以上の口径と440倍以上の倍率は殆んど必要無く、15—20糎、300倍位が最高能率を發揮した標準と思考される。(未完)

## 先づ天を知れ

賀川 豊彦

日本の氣象學者は天文を考へず、日本の天文學者は氣象學を無視する。しかし、周期的に起る旱魃に、木星と土星のそして火星と金星の引力の作用がないと、誰か否定し得るか？ 印度の飢饉を見ても、それは殆んど木星の運行と一致し、日本の旱魃は大抵木星と土星とが地球に最も接近した時に起つてゐる。

月が地球の水を引き上げることが出来るならば、木星や土星が空氣ぐらゐは引張るだらう。木星は12年目に、土星は30年目に一回轉する。

天文學は唯單に抽象論として研究さるべきではない。火山の爆發、地震、海嘯の起元、又旱魃と洪水と、寒さと濕り氣に關係させて研究さるべきである。

天を語るものは、先づ天を知らねばならぬ。(「皇紀二千六百年信仰者日記より」)

編者曰く：賀川先生の言はれることは一面の眞理に違ひありませんが、しかし木星や土星が地球の氣象や災變に關係するやうに解されるのは少々脱線でせう。本誌の次號に主筆の意見が載りますから御覽下さい。